

にほんごのせかい

# 高级日语

精读篇(一)

王秋菊 / 总主编

王 岩 陈永岐 / 主 编

山田高志郎 山田阳子 多田俊明 / 审 校



北京大学出版社  
PEKING UNIVERSITY PRESS

# 高级日语

——  
精读篇  
(一)

总主编：王秋菊

主编：王岩 陈永岐

审校：山田高志郎 山田阳子 多田俊明

北京大学出版社



图书在版编目 (CIP) 数据

高级日语·精读篇.1/王秋菊总主编. —北京:北京大学出版社, 2011.5  
ISBN 978-7-301-18796-8

I. 高… II. 王… III. 日语—阅读教学—高等学校—教学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2011) 第 067794 号

书 名: 高级日语——精读篇 (一)

著作责任者: 王秋菊 总主编

责任编辑: 兰 婷

标准书号: ISBN 978-7-301-18796-8/H·2812

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://www.pup.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672

编辑部 62759634 出版部 62754962

电子邮箱: [lanting371@163.com](mailto:lanting371@163.com)

印 刷 者:

经 销 者: 新华书店

787 毫米 × 1092 毫米 16 开本 13.75 印张 300 千字

2011 年 5 月第 1 版 2011 年 5 月第 1 次印刷

定 价: 32.00 元

---

未经许可, 不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有, 侵权必究 举报电话: 010-62752024

电子邮箱: [fd@pup.pku.edu.cn](mailto:fd@pup.pku.edu.cn)



## まえがき

二十一世紀に入り、中国での日本語教育も大きく変化しています。それは、従来の「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の四技能の習得だけでは、多様化した社会のニーズに応じられなくなってきたからです。この変化の内容を大別すると、次の二点が重視されてきたことに集約されます。一つは言語運用能力の

重視で、もう一つは異文化コミュニケーションの重視です。

しかし、中国国内における現在の日本語教育事情については新たな研究が進められている反面、伝統的な教材および教授法に頼る指導が続けられています。

この現状の矛盾を解消すべく、『高級日語 精読編(一)』、『(二)』を編集・出版することになりました。本書の出版・編集の原点は、「精読」に新たな意義を持たせることにあります。新たな意義とは、単に「読む」にとどまらず、より積極的に「読む」ことで異文化の思考・行動様式を知り、理解を深め、学習者の人間形成に役立てることを指しています。

本書の特徴は内容や難易度を考慮し、ジャンル別に作品を選択・区分したことにあります。このような配

列区分は、中国での精読教材にはこれまでに見られませんでした。この配列区分の利点は、①同じジャンルの作品をまとめて「読む」ことで各ジャンルの作品の読み方を習得しやすいくこと、②読んでいる作品がどのジャンルの作品であるかを特定しやすいくことなどにあります。本書では、「随想」、「小説」、「評論」、

「詩・俳句・短歌」の四種に分類しています。取り上げた作品は伝統的なものに加え、新しい作品も豊富に幅広く取り入れました。

本書は各ジャンルの学習目標、作品本文、著者紹介、課題で構成しています。それぞれの作品を読む前に各ジャンルの学習目標を把握することで、各作品の理解を深めやすくなります。作品本文については、行間に幅を持たせてあります。これは、学習時にふりが

なやメモを書き入れるためのスペースとしてご利用いただくためです。著者紹介では、著者が活躍している時代背景やその他の作品を挙げることで、学習者の自発的学習の手がかりにさせていただくことが狙いです。課題では、各作品の内容理解から人間形成に役立つ設問を用意しました。

『高級日語 精読編(一)』は、およそ六百時限の初・中級精読を修了した学習者を対象にしています。

本書は二百四十時限の学習を念頭において制作しました。『高級日語 精読編(一)』の学習後は、引き続き『高級日語 精読編(二)』の学習へと引き継がれます。

『高級日語 精読編(一)』、(二)』は実際の授業を通して蓄積してきた経験、課題を踏襲した成果の結晶で

す。本書の制作準備は二〇〇三年に開始しました。長  
きに亘り、実際に高級精読の授業で扱った作品の中か  
ら検討を重ねて作品の選択を行いました。また、実際  
の指導で改良を加えてきた経験を学習目標や課題等に  
盛り込み、今回の出版へとつながりました。

『高級日語 精読編(一)』の執筆、編集、校正は中  
国・東北大学外国語学院日本語学部に設けた『高級  
日語 精読編』編集チームで行いました。編集チー  
ムは、東北大学外国語学院・王 秋菊 教授、同日本  
語学部・王 岩 准教授、同学部 陳 永岐、日本語  
教育専門家で同学部の山田 陽子 博士、山田 高志  
郎、多田 俊明、で構成いたしました。

『高級日語 精読編(一)』、『(二)』の出版には、北京  
大学出版社の 蘭 婷 女史 に多大なるご尽力を

# 目 次

## 随想（一）

日本語のころ .....	金田一 春彦	2
冒険の精神.....	羽仁 進	10
包む.....	やまだようこ	15
沈黙の世界.....	加藤 秀俊	21

## 小説（一）

ナイン.....	井上 ひさし	27
バッタと鈴虫.....	川端 康成	37
鏡.....	村上 春樹	43
ころ.....	夏目 漱石	52

## 評論（一）

知識の扉——学ぶことの身体性.....	港 千尋	77
ある〈共生〉の経験から.....	石原 吉郎	83
現実と仮想.....	茂木 健一郎	91

## 詩・短歌・俳句（一）

千の風になって.....	新井 満 訳	98
俳句三句.....	松尾芭蕉 他	102
短歌三首.....	俵 万智 他	105

## 随想（二）

友情	中野 孝次	109
真実の鏡	池田 香代子	114
お辞儀	向田 邦子	119
樹の根	和辻 哲郎	129
枕草子	清少納言	135

## 小説（二）

城の崎にて	志賀 直哉	141
羅生門	芥川 龍之介	150
高瀬舟	森 鷗外	161

## 詩・短歌・俳句（二）

二十億光年の孤独	谷川 俊太郎	176
短歌五首	正岡 子規 他	180
俳句六句	正岡 子規 他	183

## 評論（二）

水の東西	山崎 正和	188
「母性」と「父性」の間をゆれる	河合 隼雄	192
現代日本の開化	夏目 漱石	198



## 随想（一）

- ◆ 作品を通じて、日本文化の特徴をまとめてみよう。
- ◆ 日常生活の体験と照らし合わせて、深く読み取ろう。
- ◆ 作品の中から、その場に適した話題を考えて、スピーチをしよう。



## 日本語の「ころ」

金田一 春彦

日本人が何気なく使う言葉は、外国人にはずいぶん奇異に響くことがあるようです。たとえば、道で思いがけなく知人に逢ったとします。日本人はその時によく、「どちらへいらっしやいますか」とたずねます。外国人のうちには、「おれがどこへ行くこうと勝手では<sup>5</sup>ないか、おれの私生活に入ってくるな」といいたくない人があるかもしれません。

日本人がそういう質問をするのは、「この人にきよ

う、思いがけないところで逢った。この人に何か変わったことでも起こったのではないか。それならば一緒に心配してあげよう」というやさしい気持からそういうのです。ですから聞かれた人は、簡単に、「ちよつとそこまで」といえばそれでよろしいのです。

たずねた人は安心して、「ではどうぞお大事に」といって、それ以上聞こうとはしません。解放してくれます。そのような場合に、決して「子供の成績が悪いから学校へ呼び出されて行くんです」といったようなことを正直にいう必要は少しもありません。そんなことを答えたなら、かえってたずねた人が困ってしまいます。

日本人は、知り合いどうしは、お互いに、相手のことを心配しあおうという気持をもって生活しているのです。

日本人はまた、はじめての人に、「お子さまは何人ですか」とたずねることがよくあります。相手が女の場合、<sup>25</sup>「そういう質問をすることは、失礼ではな

いか」と、よく西洋人などは思う人がいるようであり  
ます。これもべつにその人の秘密を探ろうというわけ  
で聞いているではありません。

日本人は、昔から家というものを大切に考えまし  
た。子供が生まれないで家の血統が絶えてしまつて<sup>5</sup>  
は大変だと思つておりました。ですからこのようなこ  
とを聞くのでありまして、答える方も大体正直にいっ  
ております。「3人です」というふうに答える。そう  
すると相手は、「それはご安心ですね」、あるいは、  
「それはお賑やかで結構ですね」といったようなこと  
をいつて喜んでくれます。

1人しか子供がいけない場合には、「まだ1人で  
す」と答えます。そうしますと、「それはお寂しいで  
すね」といつてみたり、あるいは、「もうお1人ぐ  
らい(子供があつた方がよろしいのに)」というような<sup>15</sup>  
ことをいうと思います。これも、こちらの家というも  
のを心配してくれている、そう考えて、日本人は子供  
のことを聞かれても、それをいやがりません。

それから、日本人が知り合いの家を訪ねたといたし  
ます。その時に、よくおみやげを持って行きます。そ  
のおみやげを差し出す時のあいさつが、また変わつて  
おります。「これはまことにつまらないものですが」  
といつて差し出します。アメリカの人などは、はじめ  
てこの言葉を聞きますと、「つまらないものを持つて  
こないで、もっといいものを持つてくればいいではな  
いか」と思うようであります。

ではなぜ日本人は、そのような場合に、「つまらな  
いものを」というのでしょうか。日本人は、ほかの人  
から何か好意を受ける場合、そのことをいつまでも覚  
えていて、将来それに対して報いをしなければいけな  
い、と思つております。日本人は、そういうことか  
ら、その前に何か好意を受けた場合、その次に逢つた  
時にはそのことを必ず話題にします。そうして、「先  
日はありがとうございました」というようなお礼の言  
葉をのべます。もしそれを忘れておりますと、「恩知<sup>35</sup>  
らず」といわれます。

そうしてまた、お礼の言葉をのべるだけではなくてその好意に相当するお返しをしようと思えます。こういう習慣がありますと、日本人は他人のところにも物をおみやげに持って行きにくくなります。つまり相手に、「今度はおまえの方から持ってこい」と言っていることになってしまふからあります。そこで物を

持って行く時には、「これはつまらないものだ。だからあなたは(私に)お返しをしようとしなくてもいいのだ」とこういわないではいられない気持ちになります。

「つまらないものですが」というのは、そういう、「これはお返しの心配は全然いらぬものだ」という言葉の代わりであります。

日本人はほかの人に何かご馳走する場合、「何もございませぬが、召し上がってください」とよく申しませぬ。もしほんとうに何もなかったら、食べられるはずありません。

これはどういふことかといえますと、「これを食べても食べなかつたと思ってください」という意味で

いつているのであります。ですから、「つまらないものですが」といつているのとまったく同じ精神であります。

さらに、日本人は、久しぶりで逢った人に対して、「先日は失礼いたしました」という人が多いようでもあります。これは、外国人のうちには、やはり心配する人が多いようであります。自分は確かにこの前この人に逢った。その時には、この人は何も自分に悪いことはしなかつた。それなのにいま、「先日は失礼しました」というところを見ると、「自分の知らない間にこの人は私に何か悪いことをしたのかもしれない」そう考えて心配する人があるといます。

が、実際にはそのような心配をする必要は全然ありません。日本人はこう考えているのです。「私はこの前この人に逢った時に悪いことをした覚えはべつにな

い。しかし自分は不注意な人間だ。だから自分は悪いことをしたつもりはないけれども、この人に何か迷惑がかかるようなことをしたかもしれない。それなら

ば、今あやまつておかなければ(いけない)」「これが日本人が考えることであります。

一般に日本人は、あやまる言葉をよく使います。お礼をいう代わりによくあやまる言葉を使います。

たとえば、バスにおばあさんが乗ってきました。そのうすると、坐っている人が立つて席を譲ります。その時におばあさんは何というか。「ありがとうございませす」とお礼の言葉をのべる人もあります。しかし、「すみません」といって、あやまる言葉を述べる人の方がはるかに多いようです。

おばあさんの気持はこうなのです。「私が乗ってこなければ、あなたはいつまでもそこに坐っていられたでしょう。私が乗ってきたばかりにあなたが立ちになつたということ、あなたにご迷惑をおかけする。これは申し訳ありません」という気持の表明であります。そういうことから、日本人は感謝の言葉をのべる代わりにあやまる言葉を述べる。その方がまた、聞く人は快いと感じます。

日本人は、一般に謝罪の言葉をのべることを大変尊びます。日本人の中で、西洋へ行って外国人のメイドさんを雇った人があります。

台所でコップがこわれました。メイドさんは、日本人の奥さんにこういったそうです。「コップがこわれました」これは、その国ではごく普通の言葉かもしれません。しかし日本人は、このようにいわれませすとあまりいい気持ではありません。

日本人の場合はどうか。「コップをこわしました」と、こういうのです。つまり、コップが割れたのは、自分の不注意のせいである。それは自分が力を加えてわざと割ったのと同じことである。自然にそのコップが割れたのとはちがうと、そう考えて、「コップをこわしました」といって謝罪の意味をあらわすわけです。これが日本人の場合、相手に大変快く響きます。

日本の警察では、同じく罪を犯した人に対して、あやまり方のよい人には、罰を軽くします。つまり、

「あやまった人は、その罪を後悔している。もう悪いことは二度としないだろう」と考えて、罰を軽くいたします。

ところが近頃、自動車に乗る人の間に、「事故を起こした時に警察に呼ばれてあやまると損をする。(あ<sup>5</sup>やまると)自分の罰を認めたことになる。だから、あくまでも自分は悪くないとがんばる方が得だ」と、そういう考えが広まりつつあります。これは、ヨーロッパ、アメリカあたりの影響ではないかと思えますけれども、私は、これは大変悲しいことだと思えます。

ところで、日本人は、あやまる場合に、ただ「すみません」といって頭を下げるそれだけの方がいい、弁解しない方がいいという考えがあります。それは、弁解するということは、自分は罪がないということを表わすからであります。口数はなるべく少なく、深く頭<sup>15</sup>を下げて、<sup>①</sup>悔悛<sup>かいしゆん</sup>の情がおもてに出るということ、これが最上のあやまり方とされております。

こういう考えの中には、日本人はあまり口数は多く

ない方がいいという考えが入っております。男は無駄口をきくものではないというふうにして日本の男の子<sup>20</sup>は育てられます。かといって、公の席では、女の人は男の人をさしおいてしゃべるといふことは、なおよくないといふふうに考えられてきました。実際昔から日本の女の人は、自分の意見はあっても、それは口にして自分で目上の人のいふなりになるといふことが、最高の女性の徳といふふうに考えられてきました。ですから上に立つ男の人は、女の人の気持を考えて振る舞わなければなりません。

こういった気持は、今でもいくらか伝わっております。いっしょに喫茶店やレストランに入ります。男<sup>30</sup>が、「何を食べようか」と、こういいます。女は、「何でも」と、こういう。そうすると男は、この女は何か好きだろうかと考えて、(女が)好きそうなもの<sup>15</sup>を考えて注文する。それが望ましい男のやり方でありました。もつとも、なかにはそんなことを少しも考えない<sup>35</sup>で、自分本意に注文してしまう男もいましたけれど

も。

以前、日本の女は、「好きだ」というような言葉、これは滅多に使ってはいけなさとされていたものであります。明治時代に、長谷川二葉亭という作家がおりました。この人はロシア語のできる人で、ロシアの作品を次々と日本語に翻訳いたしました。ある作品を訳していた時に、年ごろの若い男女の恋愛のクライマックスの場面がありました。男が、「I Love You」という。女もそれに答えて、「I Love You」といって接吻を交す、そういう場面であります。

ここで二葉亭は、女のいう「I Love You」という言葉、これをどのように日本語に訳すべきかと考えて、二日二晩苦悶したと伝えております。男の方の「I Love You」は、「僕は君が好きだ」といってもいいし、「私はあなたを思っております」といってもいいのです。何でもいいのです。ところが、女の人の方に対しては、そういう言葉がなかった。「私もお慕いしておりました」と、今でしたら、いっていいはず

でありますけれども、もし当時、そのようなことをいったとしたならば、その女の人は、教養のない女だということになってしまいます。そして、その女の主人公のイメージがこわれてしまう。そこで二葉亭は、この女の「I Love You」というところをどのように訳したかということになりますが、二日二晩考えた末、到達した訳は、「死んでもいいわ」という言葉だったそうです。

10 もっとも、これはずいぶん前(明治)の話でありまして、今の(昭和の)日本の女は、そんな窮屈な習慣はもっておりません。

最後に、日本人の言葉は、よく非論理的だといわれます。本屋の店に入ってお客が、「スペイン語の会話の本はありませんか」といったとします。その場合、(その本が)ないとします。そうしますと、店員は、「ございませんでした」と答えます。ないのは現在の話であります。過去の言い方で答えます。これはなぜでしょうか。これは、答える人としては、「私ども

としては、当然スペイン語の会話の本を用意しておくべきでありました。それを私どもの不注意で用意しておりませんでした」こういつている気持なのであります。つまり、長くしゃべるべき言葉を短くはしよっていったことから、このようなことが起こっているのであります。日本人は、あまりしゃべらない方がいいと考えられている。このことから、なるべく短くいった方がいいという考えに進みます。

そのために、こういった矛盾が起こることが多いのであります。これは、おそらく皆さまが日本人の会話を聞きながら、いろいろお感じになることが多いと思います。

(一九八二年 一二月)

### 著者紹介

金田一 春彦 (きんだいち はるひこ) 一九一三(大正二年)〜二〇〇四(平成十六)年。日本の言語学者、国語学者。国語辞典などの編纂、方言の研究でよく知られている。著作『日本語』など多数。

### 注

- ① 悔悛してしまった罪や過ちを反省し、心を変えること。

## 課題

- 一、日本人はお土産を差し出すとき、なぜ「まことにつまらないものですが」と言うのか。あなたの考えを述べなさい。
- 二、この文章から日本語のどういう心が読めるか、まとめてみよう。
- 三、「一般に日本人は、あやまる言葉をよく使います。」とあるが、例をあげて、あなたの考えを述べなさい。
- 四、「すみません」の使い方をまとめてみよう。